

石井至の世界放浪記

カストロの影響力は絶大

今、この原稿をロサンゼルスのホテルで書いています。今朝三時にドミニカ共和国のサントドミンゴのホテルをチェックアウトし、マイアミで乗り換えて飛行機に乗ること五時間半。先ほどロスに到着した。

読者の皆さんは、ドミニカくんだりまで何をしに行ったのだと不思議に思っているかもしれない。そもそもドミニカがどこにあるのかもピンときていないかもしれない。

ドミニカはカリブ海にあり、大地震で有名になったハイチと同じ島・エスパニョール島にある。ハイチは西側でドミニカが東側だ。

ドミニカは人口が一千万人もあるカリブの大国だ。首都サントドミンゴは人口が二百万人の大都市。読者の想像とおそらく違うだろうが、交通渋滞が普通にある大都会だ。

何をしに行ったのか。実は私は駐日ドミニカ大使館の顧問を四年前からしている。かれこれ十回くらい訪問している。行き始めたきっかけは二代前の駐日大使だったホセ・ウレニヤさん

と友達になったことだったが、その経緯は「グローバル資本主義を卒業した僕の選択と結論」(日経B.P.刊)に詳しく書いてあるから、そちらをご覧ください。

その後、今年八月まで駐日大使をしていたペドロ・ベルヘス大使に約四年前に顧問就任を依頼され就任した。昨年はドミニカを三回訪問した。大統領選挙があったからだ。ダニエル・メデナ大統領が当選したわけだが、一月にそのダニエルの選挙の応援に、五月は選挙投票日当日に、八月は大統領就任パーティに招待されて行った。

今回は、昨年十二月に日本ドミニカ友好議員連盟会長に就任して頂いた衆議院議員・遠藤利明先生に、ダニエル以下、政府要人を紹介するための訪問だ。

九月七日に二〇二〇年のオリピック開催地が東京に決まったが、遠藤先生はオリピック招致に関する国会議員の責任者の一人だ。そのため、結果はどうあれ九月七日にブエノスアイレスにいくことだけははっきりしていたので、その帰りにサントドミンゴに寄って頂くことにした。

九月八日夜サントドミンゴ空

港にまで、ベルヘス前大使、バラゲール公使参事官と共に行き、日本大使館の佐藤大使、竹谷参事官と合流し遠藤先生をお迎えした。遠藤利明先生は、五輪招致で実績を出したが、それ以外でも、大学入試のセンター試験を廃止し英語試験はTOEFLを導入するなど思い切った改革を決定して注目を集める有力政治家だが、私は個人的には将来の日本のリーダーになる人だと思っている。誰からも好かれる人柄で、日本という枠だけに留まらない世界的なリーダーになりえるのではないかと期待している。

オリピック招致活動のため、七月の参議院選挙以降は日本にはほとんどいなくなった遠藤先生はお疲れに違いなかったが、空港でお迎えしたときは、東京五輪決定で「一気に疲れがふつとんだ」とのことでお元気がだった。

ドミニカには中南米の他の国と同じく、国策で移住した日本人がいる。今回の旅程では、サントドミンゴ市内にある慰霊碑とモニュメントに、最初に献花と慰霊をした。

事実上わずか二日間の滞在だったが、面談はダニエル・メ

デナ大統領、フェルナンデス前大統領・与党PLD党首、パレド上院議長・与党幹事長、モンタス経済企画開発大臣、モラレス外務大臣と、遠藤先生には、ドミニカで偉い順番に五人に会って頂いた。また、以前来日したときにお目にかかったメロ高等教育大臣にも表敬訪問をした。

ドミニカは現時点で日本にとって重要な国とは言えない。しかし、これから数年の間に起こるであろう一連の出来事の「鍵」となる国だと思っている。

これから数年の間に、カリブ中南米で何が起るのか。一言で言うと、その地域での勢力地図が一気に変わる可能性がある。

一九二六年生まれのキューバのフィデル・カストロは今年で八六歳。すでに「引退」した身だが、その影響力はキューバのみならず地域で未だに絶大だ。ベネズエラのチャベス前大統領やボリビアのモラリス大統領との親密な関係は有名だが、要はフィデルはカリブ中南米の反米のアイコンなのだ。

日本外交の弾力性を

そのフィデルはまもなく亡くなる。フィデルが死ぬとどうなるか。アメリカはこれを機会に一気にキューバを含む反米国家へ

のアプローチを始めるだろう。アプローチは硬軟あわせたものになる。中国も黙ってそれを眺めてはいない。フィデル亡きあとの反米同盟をオルグしに進出して行くことは想像に難くない。中国はすでに準備を始めている。ニカラグアの運河は良い例だ。

つまり、数年以内に、カリブ中南米に大混乱期がやってくる可能性が高いのだ。そのときに日本はどうするのか。ドミニカはどういうポジションになるのか。

実は、ドミニカは台湾と国交があつて中国とはない。ダニエルが言うには、最近、中国と国交を結ぼうとしたが、台湾と国交を結んでいる国とは結ばないと断られたそうだ。つまり、アメリカにとつても中国にとつても、カリブの大国・ドミニカ共和国が鍵となる国になるに違いない。

その状況で日本はどうすべきか。もちろん遥か彼方遠いカリブの話だから、日本は静観するというのが一案だろう。しかし、私はその考えには組みたくない。

なぜなら、カリブ中南米の話だけではなく、隣国・中国の世界戦略に関わるからだ。また、木村三浩さんと同じく対米自立派の私としては、こういうときにこそ、日本の存在感をアメリカに見せつけるべきだと考

えている。そのためには、国内支持率九〇%のダニエルと、三年間は政権交代しない日本とが緊密な関係を結ぶべきだと考えている。

だからこそ、今回の遠藤先生の訪問に際しては、政府間の交流を活発化するだけでなく、政党同士(ドミニカの方でPLDと自民党)の交流も始めることで合意して頂いた。

私には地位も立場も影響力もない。そんな一民間人の私を何を荒唐無稽なことをと読者の皆さんは思っているに違いない。

当然ながら、非力な私には、影響力のある人たちに行動してもらえない。そのために、何度も粘り強く接触し、何か月も何年もかけて考えを伝え、協力してもらって以外に手段はない。いつも自分の力の無さを思い知らされるが、誰かがやらないうちにも始まらない。自分の理想を実現するためには、自分が行動を起こさすかない。

いつも頑張っている木村三浩さんを見ていて、奮起しているのは私だけではないだろう。

石井 至(いしい・いたる)

昭和四十年、北海道生まれ。東京大学医学部卒。フランス系のインドスエズ銀行を経て、平成九年に石井兄弟設立。同社代表取締役。金融ハイテク技術コンサルタントを行う他、東京にて幼児教室「アンテナ・プレスクール」を主宰。